

## 表紙説明

『自分の畑』晨報社版から北新書局版に改変した時、周作人は表紙の意匠も変えた。「自分の畑」に種蒔く人を描いたものであるが、ミレーの原画からではなく、それを模したゴッホの種蒔く人から新たに起こしたものと思われる。題字をも含めて藍色で刷られ、朝日（ゴッホでは夕日のように見えるが、ここは朝日だろう）を背景に広い畑に種蒔く人のイメージは、当時の周作人の文章の主張と情調ともよくマッチしていた（1）。ところが（3）の香港実用書局版になると種蒔く人が消えて、太陽もなく、ただ荒蕪に帰しただけで広い曠野が広がるばかりである。香港版は1972年10月の日付を持つから、わたしは最初、実用書局の編集者もなかなかやるなあ、畑から種蒔く人を消して、畑も荒地にして、1967年に亡くなった主人公周作人に哀悼の意を表したのだらうと考えた。しかし高井美香さんがインターネット上から（2）を見つけてくださった。これは明らかに（3）と同じ意匠である。違うのは（3）には書名・著者名と「実用書局」という発行者名があるのに、（2）には発行者名がないことである。インターネット上には説明がないので詳しいことはわからないが、書影からみても（3）よりは古そうである。となると（3）はただ（2）を襲っただけで、哀悼の意などはなかったのだらう。（1）はわたしの確認では少なくとも1935年10月の17版まで北新書局版で使われている。周作人が意匠の改変に関わったとすれば、それは1935年10月以降の版である。それはあり得ることで、彼は、ひところは自分の畑があると思ったが、今考えると、そんなものはなく他人の畑だったと述べているからである。だから種蒔く人が消え、ただ他人の畑、あるいは荒蕪の地が広がるばかりなのかもしれない。しかしまた同時に、（2）に発行者である「北新書局」という名がないことから、それが海賊版である可能性も否定できない。海賊版ならば周作人の意思とは関係なく、またその発行時期も確定できない。そして香港実用書局版も、その海賊版を襲った可能性があり、とんだ食わせ者ということになる。というのは、実用書局版の奥付には、「1929年上海北新書局版重印」とあり、中扉にも「北新書局印行」とし、中身も北新書局版と全く同じであるにも関わらず、表紙だけ（2）に変えたのはなぜか。ともかくこれは（2）の現物を確かめられないのでなんとも言えない一つの謎である。